

| | | |
|------------------------------------|--------------------------|----|
| ■WAVE／夢のなかった私の「夢のタネ」 | 野村絵美子… | 3 |
| ■アクセス ナウ！／スポーツと歯・口腔の健康づくり | 安井 利一… | 4 |
| ■羅針盤〈第66回〉学校体育について大いに語ろう！ | | |
| (1) 座談会：子どもたちの豊かなかかわりと小学校体育の今後のあり方 | 白旗 和也／矢野ゆう子／小島 大樹／松田 恵示… | 6 |
| (2) これからの小学校体育：私はこう思う | | |
| ①学校と地域に生きる子どものスポーツライフ | 松田 雅彦… | 14 |
| ②障がい者スポーツの楽しさを子どもたちへ | 高橋 秀文… | 15 |
| ■実践報告①／6年生・サッカー（埼玉県川口市） | | |
| ・「生きる力」をはぐくむ学習活動の充実 | 益岡さおり… | 16 |
| ■実践報告②／3年生・表現運動（東京都三鷹市） | | |
| ・心と体を解き放ち、ペアでかかわりを深める授業の工夫 | 花坂 未来… | 20 |
| ■連載／外野席から〈第39回〉 | | |
| ・日本の未来と「遊び」としてのスポーツ | 岡崎 満義… | 24 |
| ■平成28年度『体育の学習』新規付録 | | |
| 『デジタル体育』新内容と使い方 | 編集部… | 26 |

◆◆◆ 著者紹介 ◆◆◆



白旗先生◆文部科学省の仕事では幼児教育にかかわっています。専門家ではない私がよばれるのは、幼児教育にも体を動かす価値を位置づけようと考えているためです。小学校へのつなぎとして少しでも貢献できるよう努めます。



矢野先生◆寒い朝でも白い息を吐きながら校庭を走り回る子どもたちを見ていると、パワーをもらえます。私たち大人も体を縮めていないで思いっきり汗をかかないと……そう思わせてくれます！ 今日1日頑張ろう！



小島先生◆休みの日には、野球や筋トレなどで身体を動かしています。今年は友人に誘われ、ハーフマラソンに挑戦することに。走りまわることが不安ですが、自身が運動を楽しむことで、子どもに運動の楽しさを伝えたいと考えています。



松田恵示先生◆Mr. Childrenの「足音」という曲の、「どんな人になっても心折れそうな日はある。『もうダメだ』って思えてきても大丈夫。もっと強くなっていける」という一節を繰り返し聴いて、歯をくいしばる毎日です(笑)。



松田雅彦先生◆現在、本校のスーパーグローバルハイスクールの担当をしています。課題研究では、評価のあり方など、考えさせられます。また、海外に出ると、スポーツが地域や言語を超えた文化であることがよくわかります。



益岡先生◆教員生活9年目、現在6年生を受けもっています。子どもたち1人ひとりが夢中になって運動に取り組み、思わず体育の授業以外でもやってみたくなるような魅力的な教材・授業づくりを目指してがんばっています。



花坂先生◆教員をしている学生時代の同級生と集まり、日々の授業実践についてざっくばらんに話すようにしている。日々の様々な教科、指導について各自が自由に話し、とても良い刺激になっている。今後も続けていきたい。

上 場企業のモーレッツ社員だった私がフラワーデザイナーに転身して1年。昔なら、女の子の「将来の夢」トップ5に入る仕事だ。でも、私はずっと「将来の夢は？」と聞かれるのがいやだった。そんなものはなかったからだ。卒業文集の「将来の夢」コーナーには、適当に「気球で世界一周」と書いた。

やがて、家庭内暴力に悩む親友の話聞くしかなかった自分が悔しく、女性や子どもの権利を守る弁護士を志した。しかし法学部に入ったものの、司法試験の勉強は苦痛でしかなく、受験を諦めて大手印刷会社に就職。そこで約8年、法務部で契約審査から株主総会の裏方、新規事業支援まで様々な仕事をした。充実していたし、やりがいもあった。でも、心から楽しいとは思えなかった。

このままではいけない、いつか心から楽しいと思える「何か」で独立したいと思いつつも、自分には何のとりえもないように思えて勇気が出ず、仕事にますます没頭することでごまかした。やがて無理が重なって、体を壊した。

1か月はほぼ寝たきり。2か月経って外を少し散歩できるようになったとき、道端の春の草花に心慰められた。3か月経ち、早く復帰したかったが、まだ長時間労働に耐えられそうにない。そこで、心慰めてくれた道端の草花を思い出し、花に触るのもいいなと考えた私は、机の前に座る練習も兼ねて、近所でフラワーアレンジを習うことにした。これが思った以上に効果的で、花の生命力が乗り移るようにみるみる体調が回復するとともに、私はすっかり花のとりこになった。

思えば小学校では園芸委員をしていて、植物は好きだった。その委員会は掃除の時間に活動しており、私は掃除をしなくていいという不純な動機で園

夢のなかつた私の「夢のタネ」



©えびこ

プリザーブドフラワー作家
野村 絵美子

芸委員になったのだが、季節の花を植え、畑で野菜を育てることは楽しかった。もっとも強烈に印象に残っているのは、先生が教えてくれたハーブの一種、レモンバーム。今も思い出す、小鉢に植えられた地味な草。「葉をこすると、レモンでもないのにレモンの香りがする!」。私は自宅にすぐハーブ園を造り、栽培に夢中になった。

その後引っ越しや受験を経て長らく忘れられていたその思いが、フラワーアレンジでよみがえった。誰に強制されてもいないのに、夢中でできること。これこそ、天職ではないか。心から楽しいと思える「何か」で、ずっと独立したかった。花にかかわることこそ、その「何か」ではないか。そんな思いが強くなった。花の世界は厳しい。でも、今まで役立たなかつた手先の器用さや美術・インテリアへの関心が生かせるし、好きならきつと何とかなる、と思った。そして、私は仕事を辞めた。

ずっと「将来の夢」がなかつたのに、今こうして子どものころ好きだったことを仕事にしているとは、われながら不思議だ。決して楽な仕事ではないが、楽しい。楽しんでいれば自然と応援してくれる人が増え、チャンスが広がる。いっとき病に伏したが、それを機に埋もれていた「夢のタネ」を掘り起こすことができ、私は本当にラッキーだった。

私のような「将来の夢」のない子にも、思わぬ「夢のタネ」がきつと埋もれている。先生方にはぜひ常識にとらわれず、子どもたちの「好き」の芽に水をやってほしい。子どもたち本人も気づかない「夢のタネ」、今まさにあなたが目撃しているかもしれない。

のむら・えみこ プリザーブドフラワーアレンジメントを、メイフェアフラワーズ村田さとみ氏に師事。昨年より、「アトリエ・ノッカ」を主宰しアレンジ制作、販売を行う。JPFAティプロマ取得。JPFAギフト制作販売代理店。「アトリエ・ノッカ」紹介HP：https://peraichi.com/landing_pages/view/vgx5v

スポーツと 歯・口腔の健康づくり



1. 噛み合わせとスポーツ

相撲の世界では「奥歯の三枚目で噛め」という伝承があるといえます。プロ・アマを問わずトップアスリートでも噛み合わせの高さを変化させる装置や顎の位置の安定化を目的とした装置などを使用し、その効果に関する記事が掲載されていることは珍しくありません。一般社会においても「重い物を持つときは歯をくいしばって」とよくいわれています。

スポーツパフォーマンスは心・技・体の総力ですが、そこに噛み合わせはどのような影響があるのかを総論的に検証したいと思います。噛み合わせは上下の歯の接触によって生じてきますが、その接触によって生じてくる接触面積、接触してから噛み締める力である咬合力、さらには接触したときの左右前後の噛み合わせにより生じてくる重心位置などの要素があります。これまでの研究において、小学生では、例えば懸垂腕屈伸のような筋力発現に奥歯の噛み締め力に関与していることが示唆される一方で、遠投では関与性が低いことも示唆されており、スポーツ競技の特性によって咬合の関与は変化すると考えられます(図1~3)。また、人によってスポーツ時に噛み締める習慣を有する者と有しない者がおり、その違いによっても発揮される能力に違いがあるとの指摘があります。噛み締めと筋力の関係については、等尺性筋収縮活動(筋肉の長さが変わらずに力を出すこと)や肩関節内転運動に効果が認められ、アームレスリング(腕相撲)等での優位性が指摘されています。さらに、ヒラメ筋(下肢のふくらはぎ側)と前脛骨筋(下肢の前側)との運動生理学的研究からは、噛み締めることで両側の筋肉が互いに緊張することがわかっています。したがって、基本的には関節の固定効果が増加すると考えられ、関節固定の必要な場面においての優位性が指摘されています。そのほか、咬合接触面積については身体

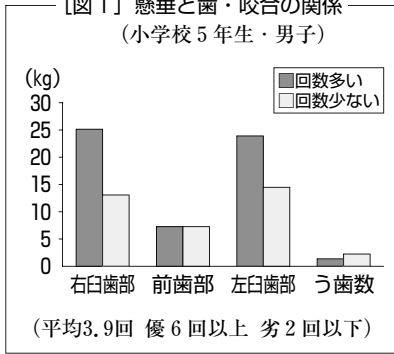
重心動揺との関連性が指摘され、静止状態の必要な場面においては咬合接触面積の増加と顎位の安定の優位性が指摘されています。

2. 障害見舞金にみる歯の外傷の状況

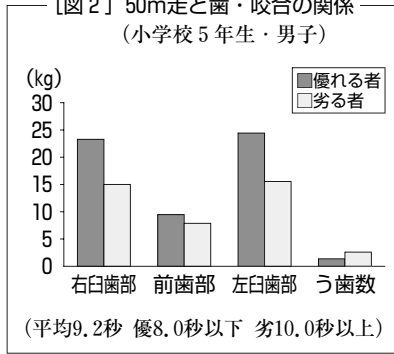
子どもの歯や口の外傷発生状況を知るには、学校で発生した傷害に対して給付を実施している独立行政法人日本スポーツ振興センターのデータを利用するのがよいでしょう。学校の管理下における児童生徒等の災害(負傷・疾病、障害、死亡)に対して災害共済給付(医療費、障害見舞金、死亡見舞金の支給)を行っており、統計データとしては最も信頼できます。学校の管理下で発生する災害の中で、平成23年度の障害見舞金給付率に占める「歯の障害」、すなわち3歯以上の歯に補綴(入れ歯やブリッジなどによる修復処置)をする14級(前歯の場合には2歯の欠損から適用)は、24.41%と最も高い数値を示していましたが、平成25年度の歯の障害については19.0%となり、視力・眼球障害(25.0%)および外貌・露出部分の醜状障害(23.4%)に次ぐ数値となりました。歯の外傷は、身体の発育状態にもなって件数が増加し、高等学校では件数が多くなっているのが特徴といえます。

障害見舞金の給付件数は、全体の傾向としても減少傾向にあるといわれています。学校管理下における歯の障害の傾向についても、近年、減少傾向になってきたといわれていますが、歯牙障害にかかわる障害見舞金の給付状況は、障害全体のおおむね20%~25%という状況が続いています。また、歯の外傷は圧倒的に上の前歯に集中していることから、高校生までの子どもたちが早期に前歯を失うことによる摂食機能、発音機能等の障害や審美性の低下などの心身に及ぼす影響は計り知れません。

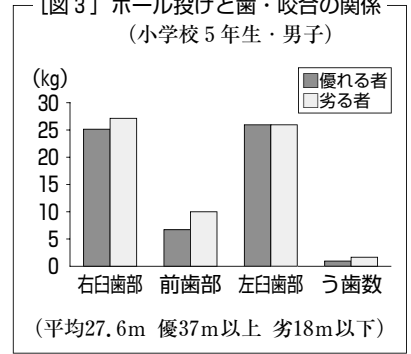
【図1】懸垂と歯・咬合の関係
(小学校5年生・男子)



【図2】50m走と歯・咬合の関係
(小学校5年生・男子)



【図3】ボール投げと歯・咬合の関係
(小学校5年生・男子)



【図4】脱落した歯の応急手当

①歯根部を持ち、
歯根部には触
らない。



②「保存液」や
「牛乳」に浸し、
乾燥させない。



③可能なかぎり速やかに
歯科医院で再植する。

3. 歯の脱臼と救急対応

歯がすぱっと抜けて脱落した場合には、適切な処置により再植が可能になるので、慌てずに対応することが望めます。脱臼した歯は可能な限り速やかに(30分以内)抜けた場所に戻すことが必要です。しかし、時間の経つのは早いので、見つけしだい、保健室に「歯の保存液」が準備してあれば保存液に直ちに入れるか、あるいは保存液のない自宅などでは「冷たい牛乳」に入れるのがよいでしょう。こうすると6時間ぐらいは余裕ができます。歯を再植するには歯根に付着している歯根膜と呼ばれる組織が大切ですので、歯に触れるときは歯冠を持つようにします(図4)。その後、歯科医院で処置を受けるようにします。

4. スポーツ外傷の予防とマウスガード

マウスガードは「スポーツによって生ずる歯やその周囲の組織の外傷を予防したり、ダメージを軽くしたりする目的で、主に上の歯に装着する軟性樹脂でできた弾力性のある安全具」のことです。マウスガードの装着は、1892ごろに英国のボクシング選手から始まったといえます。現在は外傷予防に使用する装置にはマウスガードという言葉が一般的に使用されていますが、ボクシングではその発祥のスポーツであり、歴史的にマウスピースと呼称されていたので、現在でもボクシングではマウスピースと呼んでいます。

マウスガードに対する保健指導には以下の項目がポイントになります。

- ①スポーツによっては歯や口腔に外傷を受ける機会があり、場合によっては歯の喪失や顎骨の骨折あるいは軟組織の障害をもたらす可能性が常に存在すること。
- ②マウスガードを装着することで、その危険性を低下させることができること。
- ③マウスガードの装着により、嘔吐感、発音障害が発生することがあること。
- ④発音障害は、サ行、タ行、ラ行などで発生するが、ある程度は調整できること。
- ⑤これらの違和感は、使用するなかで徐々に改善されること。
- ⑥むし歯や歯周病は装着前に治療を完了しておくこと。
- ⑦定期的(1年に2回程度)にチェックを受けること。
- ⑧使用頻度、発育途上にある年齢かどうかなどの要因で作り替える期間が異なること。



▲カスタムタイプのマウスガード

歯や噛み合わせは、運動やスポーツと大きなかわりをもっています。健康のため、記録のためと目的は違っていても、しっかり食べて身体づくり、噛み合わせを保って、外傷を予防することが基本といえます。



①座談会：子どもたちの豊かなかかわりと 小学校体育の今後のあり方



日本体育大学教授 **白旗 和也**

東京都調布市立
第三小学校指導教諭 **小島 大樹**

神奈川県川崎市立
栗木台小学校校長 **矢野ゆう子**

(兼・司会)
東京学芸大学教授 **松田 恵示**

第1部●これまでの体育—成果と課題

松田 今回は「学校体育について大いに語ろう！」の第2回ということで、この座談会では「子どもたちの豊かなかかわりと学校体育」にテーマを絞りましてお話し合いたいと考えています。前号と同じく、前半では「これまで」について、後半は「これから」についてと2部形式の形をとりますが、ご自由にご発言願いたいと思います。

まず白旗先生から、体育の授業と子どもたちの豊かなかかわりということで、現在どんな授業が広がっているのか、あるいはどんな成果があげられているのかなどについて、感じておられることをお話いただければと思います。

■失敗を恐れる子ども、みんなとかわれない 子どもたちが増えてきている

白旗 これまでいろいろな学校の研究発表を見ましたが、「かかわり」ということを大事にしている学校がまた増えてきているのではないかと思います。それは、そこに成果があったことと、逆にまだ課題が見えるからです。具体的な例をあげま

すと、かつては体育の研究発表の授業の準備・片づけは、多くの学校で先生がやっていました。すでにできあがっている場から授業が始まり、授業が終わると先生たちがまた片づけていたというのがたくさんありました。場の準備・片づけは大事な学習場面で、ここで学べることもたくさんあるため、学習指導要領の解説には明確に示されています。そうしたことが見直されて、準備・片づけが意味ある学習としてきちっと行われている学校が目立つように思います。また、体育の場合、子どもたちが動いて学習しますので、よい人間関係ができなければ、体育でのよい学習はあり得ないことは、先生たちもよくわかっていると思います。体育での人間関係を道徳の授業で生かしたり、学級経営に生かしたりと、そういった話をよく聞きます。

松田 矢野先生、現在は校長先生という立場ですが、このあたりについて感じられていることがあればお願いします。

矢野 体育は、子どもたちどうしや教師とのかかわりが非常に密な教科だと思います。子どもたちは体育の学習を通してきまりを守ることや協力、

公正な態度などといった部分も養われてくるので、それらと非常にかかわりのある教科だと思っています。私たちは、「より楽しい体育」を目指してやってきたのですが、子どもたちは体育なら何でも好きかという最近少し違ってきていて、自信がもてないとか、失敗を恐れる子どもがいます。またみんなとうまくかかわれなかったり、人間関係を気にしたりする子どももたくさんいます。ふだん、外で群れて遊ぶ経験も昔と比べて少なくなってきたので、より教科としての体育や、教師のかかわり、指導・支援が重要になってきているのかなと思います。

松田 小島先生はいかがでしょうか。

小島 学級経営については私自身、体育の授業を核にしてきていることは間違いないと思います。しかし、矢野先生のおっしゃるように、確かにひとりでポツンとしている子や、非常に親しい友達としか話せないような子がよく見受けられるようになってきています。それらの子どもたちにどうやってみんなと自然なかかわりをもたせるか、また教師はどうかかわっていけばよいのか考えながら行っており、課題として常にもっています。

松田 体育の成果とともに、今の子どもたちのかかわりが非常につくりにくくなっているというご指摘が出てきたわけですが、体育の学習指導がよい先生は学級経営もよいとよくいわれています。このあたりはいかがでしょうか。

矢野 1人の子ができたことをクラスみんなで喜べるような関係や、具体的にアドバイスできるような関係、そういうことが必要だと思います。白旗先生がおっしゃるように、体育の授業でよい人間関係ができなければよい授業はできないことは、先生方、わかっていますよね。クラスのみんながどういう方向を向いていくのがちゃんとわかっている、みんなで協力し合う関係ができていれば、他教科もそうですが、学級経営はやりやすいと思います。逆に体育だから学級経営がうまくいくということもあると思います。

■だれもができるアドバイスのための手立てを

白旗 ちょっと視点を変えて、なぜ体育が学級経営と結びつきやすいかということを考えたとき、「自由」と「規律」の関係というのがあると思います。一般的に、よいかかわりというのは自由と

の関係です。何をしても認めてもらえるとかね。一方で規律がきちんとしているのも、よいかかわりのうえで非常に重要です。学習指導要領では、小学校段階では、「きまり」や「約束」を守る。それが中学校では、すべきではないことはやらないといった「マナー」になります。最近、小・中学校のつながりがよくいわれますが、この積み上げが中学校を含めてできていけば、自由と規律の両立ができると思うのです。

一方、運動学習の中ではまだまだ先生方が困っているのが見えます。運動学習での学び合いの中でのかかわり合い、例えばグループで見合ったり、教え合ったりする活動はよくやられていますが、実際にはアドバイスしたほうも、言われたほうもよくわからずにやっている部分がありますね。ある程度の具体的な手立てを用意しておかないと、運動学習におけるよいかかわりというのは仕組みのないのではないかと思います。

小島 実際の授業でいいますと、ペアだとかトリオだとかで教師が組ませることがあります。もちろん、学び合いの学習を学ばせるためには必要なことだと思います。しかし、先生に言われたからしかたなくやっているところが見えることがあります。私のクラスでは、気になったことや疑問はすぐ隣やまわりと相談するようにしています。体育の学習だと、本当に運動にのめり込んでいけば、学習グループがなくても隣やまわりの人にアドバイスを求めることを子どもたちはしますし、アドバイスも自発的に行っています。実は、そのことが本当に大事ではないかという気がします。ですから、運動にいかにもめり込ませるかがすごく大事だと思います。アドバイスするための見るポイントを絞るなど、いろいろ手立てはあると思いますが、かかわりということでは、学習に対していかに能動的になれるかということが最大の課題かなと私は思っています。

松田 これまでの体育で主にやってきたのは、グループ学習ですが、グループの中で子どもたちが学習課題をめぐってかかわり合い、互いに支え合っていくのに難しい面が見られるということですね。

矢野 グループ学習では技能に差がある子どもたちが1つのグループになっていて、だからといって、上手な子だけがリードしてあげるというので



はなくて、アドバイスし合ったりするなかで、技能差があるからこそ学び合いができていく。できない子ができる子の動きを見て自分もできるようになりたいとか、今の自分を客観的に見ることが

できるとか、いろいろな子がいるから楽しいのかなと思いますね。ボールゲームなどで相手チームに勝ちたいというときに、チームの目標に向けてチーム全員の貢献と達成によって成し遂げられるということが子どもたちにとってすごく魅力的な活動なのかなという気がします。同じ視点で物事を見ることができたり、できそうだ・できた、というときに友達に伝えたくなくなったり、友達と共感することでまた楽しさがアップしてさらにやる気を起こす。友達や仲間がいるから、と感じますね。そういうかかわりをどうつくっていくかという、やはり課題はあるように思うのです。

■だれもが最初から取り組める

やさしい教材の開発とITC・学習カード

白旗 先ほどの自由と規律という話ですが、よいコミュニケーションがとれていれば、両方ともきちんとかやれるということです。そこにいくためには、すべての子が自信とか有能感を感じられるような集団をつくっていくことだと思うのです。そこに迫る手立てはいくつかあると思いますが、1つに教材があります。教材によってうまい・下手がはっきりしてしまうので、溝を埋める手立てが必要で、例えばキャッチバレーです。私が指導している大学の授業で、学生の中にバレーボールの日本選手権クラスの選手が3人もいるのですが、彼らに中1ぐらいの体育の授業の指導案を作成させたことがあります。彼らはずっと部活でバレーボールをしてきていますから、「うまくなるまで楽しめないだろう、だからまず練習」という発想なんです。10時間単元のうち、8時間ぐらいずっと練習で、最後の9時間目、10時間目でやっとゲーム。待ってられないですよ。体育の授業というのは10時間程の中での勝負ですから、最初から楽しくなければ子どもたちはついてこないのではないかと助言してから「君の苦手な種目は何か」と

聞くとサッカーだというので、「じゃあ、授業で最初から楽しめるようなサッカーはどんなサッカーだと思うか」と聞くと、「手を使ってもいいようなルールだったら」というので、「それじゃあサッカーではなくなるけど、つまりは最初から自分でもできそうなルールでやってみる、そうすれば楽しめるということではないか」とアドバイスしたので。具体例としては、キャッチバレーボールを紹介したのですが、それを授業でやったらみんな、ものすごく盛り上がったと感激していました。そういう教材をどうつくるかということですね。

もうひとつ、教え合いというのは非常に難しいと思うのです。何の下準備もない場で友達に動きを見てもらって「どうだった?」と聞かれても、その子の感じ方しだいということになってしまいます。ましてや自分ではできないのにできる子の技を見てあげてアドバイスするのは相当敷居が高い。ところが、足は伸びていたか、手はどこに着いていたかなど、誰が見てもわかるような視点を決めて伝え合うということであれば、誰でもできると思うのです。しかも自信をもって言えます。伝え合いで自信が深まってくれば、自分ではできなくても伝えてあげられるということになってきますから、コミュニケーションも活性化します。

松田 今ある自分の力がいっぱい発揮できる、そういうやさしい運動との出会いを教材という形で提供していくということと、見合う・伝え合うといったポイントがしっかりと用意されている、そのあたりが課題ですね。

小島 子どもたちみんながすぐにでも楽しめる、のめり込める教材の必要性はすごく感じます。同時に、どこが楽しいのかを前もって子どもたちに伝えておくことも大事かと思います。例えばキャッチバレーボールは、「ボールを相手コートに落とせるか、ボールを自分のコートに落とさせないようにすることが楽しいのだよ」と、先に子どもたちに伝えることでまったく動きが違ってきます。個人種目でいえば、いかに見るポイントを絞るかになるかだと思います。例えば、鉄棒運動のさか上がりでは「ひじが伸びているか曲がっているか」、前回りおりだったら「地面に置いたケNSTEPの中に着地できるかどうか」を見せるとか……。そういった、見たままをお互いに伝え合うのは授業ではよく行います。



松田 今のお話の、お互い見合う活動をする場合、最近の授業ではICTの利用というのがありますよね。そのあたりはどうですか。

小島 ICTは使ったほうがいいと思いますね。昨年、鉄棒の学習を行ったときにNHKからiPadを10台借りたことがあります。3人に1台ですが、それだけでも違いますね。学習がすごく活性化しますし、子どもたちのコミュニケーションも活発になります。

矢野 オリンピックの陸上選手のリレーのバトンパスなどのビデオを授業の前に見せて、どうしてこんなにスムーズにバトンパスできるのだろうか、こんなふうにできたらいいね、という思いをもたせて授業をすることもありますが、器械運動などはICTで自分の動きをすぐにその場で見させて振り返らせるというのもすごく有効だと思います。ただ、やたら撮影すればいいというのではなく、どこでつまづいているのか、何を見たくて撮るのかを子どもたちにきちんと伝えなくてははいけないと思います。小学校での教え合いというのはポイントを絞った見合い・伝え合いかもしれませんが、子どもたちには励ましなどの大きな力になると思いますね。

白旗 ICT教育に関しては、デジタル教科書なども長くいわれてきていますし、社会情勢を考えるともう後ろには戻れない時代だと思います。数年前にカンボジアに行きましたが、日本と比べると施設や設備ではまだまだ遅れている面があるのですが、タブレットに関しては校長先生方も普通に使っていましたね。スマホも日本より先に普及していましたし、中学校の授業でタブレットなどを活用しているかどうかをOECDが調査したところ、アジアで日本の普及率は最下位だったと聞いた記憶があります。日本がどうして遅れているのかというと、私が思うに、活用しなくてもよい授業をやっていたからではないかと思うのですね。しかしこれから、これを活用することによってより質の高い授業をつくっていきける可能性は大いにあると思います。

タブレットの話題からそれますが、学習カードも重要だと思うのです。かかわり方も含めて、いいコメントを教師が記入して子どもたちに戻すというシステムが、その後の課題づくりとかグループの調整にも重要な役割を果たしてくると思いま

すので、もう少し効果的に使えないかと最近研究を始めています。子どもたちの活動記録を見ることを主体に、ただなんとなくやっているというのがいっぱいあるのではないかと思いますので……。

矢野 学習の見通しと振り返りというのはすごく大事で、学習カードに書かれた単元全体の流れや道筋を、子どもたちがパッと見ただけでわかるような工夫をしている先生もいますし、その時間ごとの学習のねらいが見えてくるような学習カードがあってもいいなと思います。何を教えるかではなくていかに学ぶかが大事だと思いますので、そういう意味では学習カードは非常に大事な指導と評価の一体化といえますか、子どもと先生をつなぐものであり、子どもと子どもをつなぐものでもあるのかなと思います。

白旗 学習カードとかかわりということを考えてときに、課題設定というのももちろんあるのですが、先生の受容的な雰囲気づくり、なんでも認めてもらえるといったことに非常に貢献できると思います。学習カードに教師が記入して戻すときのヒントとして、いちばん効果があったのは称賛から入ることですね。うまくいかないことがあったり、友達とのトラブルなんかがあったりすると、先生はもっとこうしなさいということから入ってしまう。しかし、よく見ていると必ずどこかによい場面があるので、学習カードではまずそれを称賛し、子どもに安心感を与えるところから入って、そのあとにこんなふうにしていったらいいねという書き方ですね。

矢野 先生に存在を認めてもらえるということはとても大事なことです。失敗も学習の一部というようにしてあげないといけませんね。

白旗 失敗してまたやり直すというのは、課題解決型の学習ですが、答えに向けてみんなが一直線に向かっているのは余裕がないですね。だからその学び方として、体育の場合、学習指導要領は2年間で提示しているので、2年間でどのようにつくるのかということです。小学校の場合は自分の学年しか見ていないので、学習指導要領の5・6年の内容を5年生の1年間だけでやろうとする先



生も出てきますよね。そうではなくて、5年生でここまでがんばったら、6年生で続きをやればいいんだよ、ということですね。もう少し、人とのよい関係をつくってじっくり調整していくために

は、時間をうまくつくりだすようなカリキュラムが必要だと思います。

松田 関連して、先ほど失敗を恐れる子どもたちが増えてきているというお話がありました。そのあたりについて詳しくお話しいただけますか。

矢野 体育の授業では、今ある力から始めますので、子どもたちにまずやってみよう、できる・できないにかかわらず動いてみようという求めます。しかし、できるかなあとすごく考え込んでしまう子がいます。特に高学年にその傾向が強いですね。「なんでもいいからやっちゃおう」という子が今は少なくなってきましたね。

■やってみることで、できる・できない・できそ うだの「あんばい」を知る

松田 なんでもいいからやってみよう、という場面は、言い方を変えると不安定、わからない、あいまい……。そういうときだからこそ、できるのか、できないのか、失敗してまたやり直す、という試行錯誤が出てきますよね。しかし、先ほどの自由と規律のお話と似たところがあって、完全に自由だとか、完全に規律という意味でのルールだけという世界では何も考える必要はないのですが、「あんばい」を求められる。そういう場面があるからこそ考えるし、学ぶ場がたくさんあると思うのです。確かに今の子どもたちは、どちらかに片寄ってしまっている。両がかえというか複眼的に見ていくことがちょっと苦手になってきているのかもしれないね。

白旗 確かに今の世の中、失敗を恐れたり、責任を気にしたり、そういうようになってきていますね。けんかする前にけんかすると言われてたり、けがをしないといけないからやっちはいけないと注意されたり……。昔はそんなこと、なかったですよ。むしろ、小さいけがなら小さいうちにいっぱいしたほうがいいなどという風潮もあったくら

いです。今は、やる前に失敗させないようにする。親もそうですし教師もそうです。だから、せめてその一部を肩代わりするのが体育ではないかと思うのです。やったことがないからできないというのではなく、どのようにしてやったらいいのか、失敗するとどうなるのか、その「あんばい」がとれていないのです。自由と規律というのも同じで、自由も規律もどこかできちんと経験して、両方とも必要であることを、言葉だけでなく実感しないとダメだという気がします。

松田 やる前からやっちはいけないと言われてるのは、本人にとってのグレーゾーンというのではないことですね。だから試すこともできない。運動とかスポーツというものがもっているよさとして、授業の中では具体的な形にして生かしていきたいですね。

白旗 かかわりも同じで、どこかで実感を伴ったかかわりがなければ、よいかかわりはできませんね。形だけよい子にしているというのではなく、よいグループにしたい、あの子とうまくかかわりたいということになると、学び方も変わってくると思います。

課題を見つけるという意味で「やってみる」という言葉は細江先生が位置づけたのですが、これは大きいと思います。教師は授業ですから課題をもたせなくてはいけないのですが、初めからもうカリキュラムがあってそれに子どもを乗せるという授業はよくないですね。大筋はなくてはいけませんが、距離感をはかる、試しの場を用意するなどそういう学びが必要だと思います。小さい子はよく仲間どうしてじゃれ合うじゃないですか、あの「人とのふれあい」というのは、人の発育のうえでとても大事なですね。ふれあうことによって、客観的に自分と相手との距離感をはかって自分を理解することにもなっているといわれています。体育の中に体ほぐしの運動が入りましたが、そういう人間の本質的な意味合いがわかってくると、学習指導に対する見方も変わってくるのではないかと思います。

松田 「人とのふれあい」というときの「触れる」という言葉は、他の五感を表す「見る」「聞く」「嗅ぐ」「味わう」に対して、文章を作るときに、例えば「わたしがあなたに触れる」というように、助詞に「に」を使うんですね。「わたしがあなたを見



る」とか「わたしがにおいを嗅ぐ」とか、ふつう助詞は「を」なのですが、触れるという言葉だけ、「に」なんですね。それはどうしてかという、主語と述語が入れ替わり可能なものに対してだけ「に」を使う場合があるそうです。例えば「わたしがあなたに触れている」は、「あなたもわたしに触れている」ことになります。つまり、言い換えても同じことを指します。けれども「わたしがあなたを見る」といったときに「あなたもわたしを見る」かどうか、わからないですよ。ですから、わたし中心の言葉なのです。「触れる」というコミュニケーションは、それだけ「わたしとあなた」が切り離せないものだし、「からだ」が中心となる体育がもっている力だと思いましたね。

また、これまでの体育がはぐくんできた力なりをさらに求められる文脈が出てきているわけです。1つは今教育界で話題になっているアクティブ・ラーニングですが、これは「主体的に」というのが重要な要素なのですが、一方で「協働的に」という部分もとても重要な要素になっています。これからの社会というのはいろいろな人々がその立場の違いを超えて、ある目標に対してかかわり合いながら方向を決めていく、協働的な社会というものが前提になってくるので、そういう力を大事にしていこうということですね。体育はこれまでそういったことを先行して積み重ねている実績のある教科ですし、可能性も大きいですよ。

第2部●これからの体育

松田 体育とかかわりについて、これまでの成果とともに問題点をお出しいただいたのですが、このあたりからは第2部としまして、これからの学校体育ということを考えたときに、工夫していきたいことや広げていきたいことなどについてご意見をいただきたいと思います。

小島 先ほどの白旗先生のお話にありましたように、やってみることに限っては、やはり教師が前もってかなりお膳立てしすぎている部分や授業がたくさんあるように思います。子どもたちのつまずきや失敗を教師がすべて予測して、失敗しないように失敗しないように指導している様子が見えることがあります。子どもたちができそうなことからまずやってみて、その中で本当に困ったとい

う実態に即したとき、そこで初めて教師の指導が入ればいいと思うのですが、もしかしたら、すべてを先に指導しておくことで教師自身が安心できるということかもしれません。また、学習指導要領でいう2年間という段階的な意識もなく、最初から到達目標に向かわせるといったような指導も多いので、教師側の意識を変えることも必要かもしれないと思います。

矢野 とにかくやってみるというのは、すごく重要だと思います。やってみることで子どもは思いや願いがわかるようになり、自分に即しためあてももてると思います。次にどうやって解決すればいいのかということになって活動を工夫し、できるようになってきたら、新しいやり方に挑戦するなど、そういった流れの中に楽しさがあると思います。教師がお膳立てしすぎるのはよくないと思いますが、やってみたいという気にさせる、そういうしかけ、工夫、手立ては必要かなと思います。また、やっている途中での教師の言葉かけなども必要だと思います。

■体育という教科の本質的なところの理解が必要

白旗 体育の評価でいうと、かかわりは態度の中の中心的部分だと思うのですが、実際によい授業を見てみますと、態度だけではなくて技能や思考・判断などそれらが全部絡んでいるのです。よい授業は、学習の課題がはっきりしているのでチームもよくまとまり、意見の出し方などもよくわかって、かかわり方もよくなるというように、全部絡んでいるのです。ですから、授業をつくっていくときに「技能」「態度」「思考・判断」を一緒に考えていかなければいけないですね。また、先ほどお膳立てという話があったのですが、かつて、どの教科の授業がやりやすいかという調査をしたことがあったのですが、算数が圧倒的に多かったのです。算数は教師にとっての道筋がすごくわかりやすい。しかし子どもたちに好きな教科を聞くと算数は上位に上がってきません。子どもの思いとずれている教科です。体育も全部流れをつくって、その上に子どもを乗せればいいのかという、

子どもの思っているところと乖離していってしまう教科だと思います。よいかかわりをつくろうと思ったら、みんなできつっていきような学習が必要ですね。規則やルールをつくるというのは思考・判断になりますが、つくろうとすれば、よいかかわりで意見を出し合える環境をつくらなければ出てきません。教師は子どもたちの思考や変容を手助けするような見通しをつくっておかなければいけないですね。

それからアクティブ・ラーニングですが、体育の場合は、よい授業を見てみますとアクティブ・ラーニングの形になっています。ただ、アクティブ・ラーニングがやられているといっても、恐れるのは、その手法だけやっていたらいいという状況にならないかということです。かつてのめあて学習にしろ、ゆとり教育にしろ、今読んでもすごく理にかなっているのです。しかし、なぜうまくいかなかったのかというと、教師が本質を理解しきれなかったからではないかと思うのです。本質的な部分を教師が理解している時間がないというのもあると思います。あの「組体操」がそうですね。どのように組体操を指導していくか。最初は2人組での組体操をじっくりと時間をかけてやるのです。人とかかわりということ、重いか、どこで踏ん張ればいいのか、相手をすごく感じて少しずつ少しずつ、つくっていくのです。しかし、その2人のかかわりの部分をさらっと飛ばしてしまっているのです。失敗してしまうのです。組体操をつくるためのコミュニケーションがとれていないということです。

話は変わりますが、私が大学の試験として作った問題に、「豊かなスポーツライフについて、この意味を説明しなさい」という設問で、そのあとに「では、そこに向かうために、例えばハードル走と豊かなスポーツライフとどういう関係がありますか」という問いが続いています。つまり、ハードル走は大人になればやらないですよ。生涯スポーツでハードル走をやっている人は相当特殊な人で、まずやらない。しかし学校体育では小学校から高校までやっています。器械運動もそうですね。その意味を理解している教師は少ないのではないかと思います。だから、学習指導要領は変わったが、授業は変わっていないという教師がおそらく大半だと思います。体育に限らずどの教科もそうです

が、その教科のキーワードなどの本質的なところを理解して授業を進めていってほしいと思います。松田 体育とかかわりということいろいろ意見をいただきましたが、最後に感じたことや言い残されたことなどがありましたらお聞かせ願いたいのですが。

小島 先ほど、大人つまり教師が変わらないといけないということをお話ししましたが、あらためてその思いを強くしました。そこで、教師として、子どもたちが失敗することを恐れてはいけないと思うのです。同時に教師自身にもいえることだと思います。このことは、子どもに「初めはできないのが当たり前だよ、何度か挑戦して少しずつでもできるようになっていくと楽しいね、最初からできちゃうのはつまらないかもね」といったように、失敗を恐れずにやってみる、失敗を認め合う雰囲気づくりをしていく必要があると思います。教師は最初から、ここはこうのようにしてやってみよう、こうならないように注意してやってみようなど、最初から80点、90点の授業を組もうとしがちですが、改めなければならないのではと思います。ボールゲームではチームの負けが続くと、失敗した子どもへの個人攻撃や言い争い、仲間割れなどが出てきますが、授業の最初に失敗は当たり前、少しずつ前進、という雰囲気づくりをしておけば、子どもたちも落ち着いて取り組むことができます。ただ、教師の手立てとして、それぞれの段階で予測されるつまづきや失敗など、きちんとした道筋をもって、いつでも対処できる手立てをしておくこと、失敗の中でもよいところを見つけだす力をつけて、そこをほめて、失敗にもめげずにやる気を起こさせる工夫・対処も必要かなと思いました。

矢野 子どもたちには日常生活で経験することの少ない動きや運動を行って、様々な基本的な動きを身につけていってほしいと思います。ハードル走はスピードに乗って走るだけでなくリズムカルにハードルを越えることによってリズムやバランス感覚等を身につけたり、少し難しい課題に挑戦して自分の体でコツをつかみ、克服したり達成したりする喜びが感じられる運動です。心身共にその後の運動や遊び、生活にかかわってくる要素を含んでいます。

また、授業が楽しければ、準備や片づけさえも



子どもたちは楽しみながら行きます。自分たちの学習は先生だけでなく、先生と自分たちみんなでつくっているのだ、そういう気持ちが生まれてきます。そのためには、どんな子どもでも安心して学習できることが必要です。スポーツにはルールがあるように、きちんときまりを守ったり、協力したりしてお互いにかかわりをもたないと授業が成り立ちません。自由と規律のバランスが大切だと思いました。より楽しく授業をしていこうという、先生だけではなく子どもたちの思いがそこに重なって初めて、「やってみる」段階から工夫しようという気持ちが生まれて「ひろげる」段階へ、そしてこだわりをもって「ふかめる」段階に、そういう自分たちの学びができていくのかなと思います。体を動かす体育だからこその気づきもあります。友達を励ましたり認めたりするほかに、こういうふうにやっていきたい、こういうゲームにしたいという子どもたちの思いがあふれてくるような授業がこれからもできるように先生方の授業研究などに期待したいと思います。

■スポーツがもっている力や魅力を体育でさらに生かしていくためには

白旗 体育ではぐくまれる「かかわり」といったときに、1つは「人と人のかかわり」、もう1つは「運動とのかかわり」が大事だなと思っています。そもそも体を動かすとどんないいことがあるか、先生たちは考えたことあるのかなと思います。体育だからやっているのではなくて……。幼児の時期に体を動かすことにどんな意義があるかという研究と成果のまとめがあるのですが、体づくりなどのほかに、意外とかかわりと深かったのは、1つ目に意欲を高めることとの結びつきが強かったことです。2つ目は協調性が高まるということです。たくさん遊んでいる子ほど協調性が高いということです。3つ目は脳への刺激がある、ただ走るということだけでものすごく脳への刺激があるということです。しかも脳の中では、情緒をコントロールする部分と運動をつかさどる部分がかなり近いところにあるので、体をたくさん動かすことが情緒の安定と関係があるということですね。そういった、運動することの意義、どんないいことがあるのかというおさえがまず1つです。次に、今、グローバル化ということと、オリンピック・

パラリンピック教育をあわせていくと、多様化の認識というところに行き当たっていくのですね。日本でも外国の人が増えたといってもまだまだです。そこで、外国の人たちとのかかわりの問題のひとつに言葉の問題があります。すべて英語とは限りません。しかし、よく話題になったり、映画などでも取り上げられたりするのにも、言葉は通じないが、ボール1つあればそこにサッカーやバスケットボールなどのゲームが始まるというシーンがありますね。言葉は通じなくても、スポーツはほぼ共通なルールなので、かかわりが生まれ、心が通じるようになるというエピソードです。それを見たり聞いたりして、ああスポーツってすばらしいんだ、言葉を越えた力と魅力があるんだなど……。だからオリンピックやパラリンピックは誰が見ても感動しますよね。同じ場面で、人種、国籍関係なく。こういったところの魅力、力といったものは、たぶん学校体育にもってきても同じではないかと思うのです。この体育がもつ本当の魅力をもう一度考えていかないことには、学習指導にかかわっても、目先の部分の変わったところだけ見て、本質のよさが伝わっていない気がします。そういう意味で多様性の認識という話題を出したのは、体育・スポーツのいちばん重要な根幹の部分で今後の体育はこれまで以上に背負っていくのではないかなと思ったものですから……。

松田 おっしゃるとおりですね。スポーツは世界をつなぐとよくいわれていますが、グローバルゼーションというのは、進めば進むほど一方ではそれぞれのローカルな人々が出会うわけですから、共通のコードが必要になるところがあるのですね。そのようななかで運動やスポーツがもっている、互いに認め合い結びつける力はとても意義があると思いますし、かかわりを体育で育てていくことは、実は集団を小さくつくっていくのではなくて、逆に多様な認識の可能性を生み出していき、大きくて広いかかわりをもつていくことでもあるのではないかと思うのです。これからの体育はますます楽しみになりますね。

本日は、たいへん貴重なお話をたくさんいただき、本当にありがとうございました。 ■

・この座談会は平成27年11月に行われました。

《1》

学校と地域に生きる子どものスポーツライフ

大阪教育大学附属高等学校平野校舎教諭
総合型地域スポーツクラブ・NPO法人しまもとパンブークラブ理事
(公財)日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会委員

松田 雅彦



最近、学校は、スポーツを楽しむ環境としては非常に特殊な場だと感じている。それは、学校にはスポーツを楽しむための条件がすべてそろっているからである。このように言うと、その何が特殊なのかと言われそうだが、学校を外から眺めてみるとよくわかる。私たちは、学校を卒業した瞬間、スポーツを楽しむために必要な「仲間」「施設」「用具」「指導者」「プログラム」「情報」など、すべてを失ってしまう。食事に例えると、学校の中ではいつでも定食を食べることができるけれど、いったん学校を出てしまうと食材や調理用具の調達から始めなければならないという状況である。本来、スポーツを楽しむためには、スポーツ種目内の学習+スポーツ種目を越えたスポーツの学習の場が必要である。しかし、この状況は、スポーツの学習を技術や戦術、ルール・マナーの学習(スポーツ種目の学習)へと矮小化してしまう。

以前、高校生に「学校を卒業したとき、やってみたいスポーツが地域になければどうしますか」と聞いたところ、ほとんどが「できる地域に引越す」「諦める」「行政にお願いする」という他力本願的回答であった。自分たちでなんとかすると答えたのは1割にも満たなかった。一昔前は、神社の境内や路地裏でいろんな年代の人と遊ぶ中で、スポーツを楽しむ場を自分たちでマネジメントしていく力が知らず知らずに育まれた。しかし現在は、塾通いや都市化、希薄になった地域性等から、そのような学習場面が消失してしまっている。

このような現状を打破していくためには、それぞれの子どもたちが、自らのスポーツライフを創造する力を意図的に育むしかけが必要である。そこでは、常に「スポーツを生活の中に位置づけたい!」という動機づけへの工夫がなされ、スポーツに関する多様な課題解決学習の場が準備されることが大切である。

前者に関しては、今の自分とスポーツの楽しい関係をたっぷりと味わわせることが重要である。高校生になると「できないこと=ダメなこと」という構図ができあがり、できないスポーツに対して非常にネガティブになる。おそらく、このことが原因でスポーツをする子としない子の二極化が生じているのではないだろうか。どの学校段階でも、今の自分で楽しむことの価値をしっかりと育まないと、年齢を重ねて「できない」ようになるとスポーツから引退してしまう。常に今の自分との関係でのスポーツの価値(楽しさ)をもっと深めたいという気持ちが豊かなスポーツライフの創造につながる。

次に、多様なスポーツの場であるが、上級生が下級生を教える、異学年で一緒にスポーツを楽しむ、地域のお年寄りや障がいのある方とスポーツを楽しむなどという場があるといい。中学生になれば地域に出かけて行って地域住民と一緒にスポーツをするとか、地域の場所を自らで確保するとか、学校外のスポーツを体験させることが大切だと考える。このような中で様々な課題を発見し、スポーツをみんなで楽しむことに焦点づけられた課題解決学習が展開できるだろう。

スポーツの原則は、「私もあなたも楽しい」ことである。世代の違う人と楽しい時間を過ごすには、同世代で楽しむ場とは違う気遣いが必要になる。学校外の公の場所では、公のルールやマナーを身につけることが必要になる。これらの体験を少しずつ積み重ねることで、スポーツ的公共性が育まれていく。生涯スポーツは学校期が終了してから始まるものではない。小学校期からすでに始まっている。小学生には学校におけるスポーツライフと地域におけるスポーツライフの2つが存在する。私たちは、この両方に着眼し、今の子どもをスポーツを考えなければならない。

(まつだ・まさひこ)

《2》

障がい者スポーツの楽しさを子どもたちへ

(公財)日本障がい者スポーツ協会常務理事
日本パラリンピック委員会副委員長 高橋 秀文



日本障がい者スポーツ協会は、スポーツを通じた障がい者の自立や社会参加を促進するため、障がい者スポーツの「普及・促進」を図る統括組織として、1965年に設立されました。1964年東京パラリンピックにおいて、日本選手の多くが病院や施設からの参加だったのに対し、外国選手のほとんどが社会人として経済的に自立し、明るくはつらつとしていたことに感銘を受けたことが協会設立のきっかけでした。その後、1998年長野冬季パラリンピックにおいて、日本選手団が大活躍し、障がい者スポーツの発展に大きな成果が得られたことから、障がい者スポーツの「競技力向上」を図る統括組織として、1999年に日本障がい者スポーツ協会の内部組織、日本パラリンピック委員会が発足しました。前者は「裾野を広げる」活動、後者は「頂点を目指す」活動をしているといえます。

2020年に開催が決定した東京オリンピック・パラリンピックのキーワードのひとつに、「おもてなし」があります。世界各国から訪れる選手への最高のおもてなしとは、いったい何でしょうか。それは、「満員の会場」です。そのためにも、私たちは子どもの教育こそ必要だと考えています。

日本のスポーツ立国戦略の基本的な考え方として、スポーツを「する、観る、支える」人の重視が挙げられています。「支える」というと、まず指導者、ボランティアなどが思い浮かびますが、観戦それ自体も「支える」ことです。子どもたちが障がい者スポーツを観に来てくれることは、まさに「支える」活動なのです。

そのためにも、まず障がい者スポーツに関心をもってもらうことが必要です。具体的には、本年度から「ジャパンパラ応援プロジェクト 障がい者アスリート交流キャラバン」という活動を行っています。4～5月にかけてお伺いした千葉市の小学校では、実際に「ウィルチェアーラグビー（車いすラグビー）」を体験してもらいました。子どもたちは試合を観戦し、車いすどうしのぶつか

り合う激しい音、迫りに驚いていました。外国では、障がい者スポーツのことを「エリートスポーツ」と呼びます。それだけ難しいことを、障がい者スポーツの選手たちは行っているということです。それは、観戦いただければわかります。また、それだけではなく、体育着を着て車いすに乗り、実際に競技を体験する活動もありました。こうした活動を通して、「自分とは違う人が特別なことをしている」のではなく、車いすを使ったひとつのおもしろいスポーツとして、より親しみをもって競技を身近に感じてもらえるようになります。その「交流キャラバン」後、休日に友達と連れ立って試合を観に来て、ファンになった選手のサインをもらい喜ぶ子どもたちの姿がありました。

世界各国と比べて、日本は障がい者に対する理解が進んでいないといわれています。そこで、東京オリンピック・パラリンピックを機に、物理面のみならず心理面でのバリアフリー化が目指されています。人間はみな、顔かたちや性格などが異なります。そのように、障がいも個性のひとつと考え、多様な個性・違いを包容する社会（インクルーシブな社会）への変革を図ることが、パラリンピック開催のもっとも大きなレガシー（遺産）となると考えていますし、スポーツにはまさにそうした力があります。

障がい者スポーツを「する、観る、支える」。そうした活動を小学校教育でも行い、感動を味わうことで、自然と子どもたちの、ひいては先生や保護者をはじめとした大人たちの障がい者理解が進んでいくことになると思います。それが、インクルーシブな社会の実現につながっていきます。

特に大人は、つい障がい者を「大変だな、がんばっているんだな」と特別視しがちです。しかし、子どもにはそうしたバリアはありません。「ほくができないことができる、すごい」と。子どもたちからこそ、社会が変わっていくのです。

(たかはし・ひでふみ)

「生きる力」をはぐくむ学習活動の充実

—課題の解決に向けた思考力・判断力・表現力の育成を目指して—

埼玉県川口市立慈林小学校教諭 益岡 さおり

はじめに

現行の学習指導要領では、児童により一層「生きる力」をはぐくむことが求められている。また、学力の3要素のひとつである「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」の育成は、保健体育科において、その要素を高めることが全国的な課題としてあげられている。思考力・判断力・表現力の育成が課題となる要因は様々だが、自己評価能力の欠如がその要因のひとつであると考えられる。加えて、コミュニケーション能力の不足や、言語活動の充実が図られていないことにより、思考力・判断力・表現力が育成されていない現状がある。そこで、児童の思考力・判断力・表現力を高める手立てとして、基礎的な知識および技能を習得する時間を十分確保し、児童自らが課題を見つけ、その解決に向けて様々な練習方法を工夫しやすい環境づくりをすることを目的とした授業実践を報告する。

1. 研究の構想 (図1参照)

2. 研究の実際 (表1: 単元計画参照)

○単元名…じりん子ワールド杯

(ボール運動: ゴール型・サッカー)

○対象児童…第6学年37名(男子21名/女子16名)

(1) 指導内容が明確な学習過程

単元を通した「身につけさせたい動き」として、単元前半では「様々なトライアングル移動」、単元後半では「パス&ラン」「スペースに走り込んでパスをもらったりシュートをしたりする」とした。また、核となる技能は「ボール保持者と自分の間に守備者がいないように立つ」とし、「ボールを持たないときの動き」にねらいを絞ることで、児童1人ひとりがどのように学習を進めることが大切なのかを明確に理解できるようにした。

(2) 様々な課題解決に応じた練習方法の工夫

誰もがゲームの中で活躍し、チームの作戦が生かせるよう、成功するための技能を高めることを重視していった。ボールを扱うことが苦手な児童が多かったため、毎時間「スキルアップタイム」を設定し、時間内のパス回数やシュート回数を記録させた。さらに、「近くにいるフリーの味方にパスを出すこと」「ボールを保持する人と自分の間に守備者を入れないように立つこと」「得点しやすい場所に動いて、シュートをすること」など、身につけさせたい技能を明確にして、「タスクゲーム」に取り組みさせた。

スキルアップタイム

《対人バスタイム》(2分)



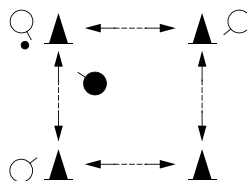
○2人1組になり、インサイドキックでパスをし合う。



《4コーナーバスタイム》(2分)



○3対1で行い、4つのカラーコーンのいずれかに走り込み、パスを受ける。



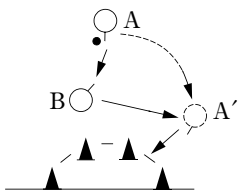
【表1】 単元計画：第6学年「じりん子ワールド杯」（サッカー）

| 時 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|--------------------------------|--|---|---------------------------------|---|---------------|---|---|---|
| 0 ～ 45 分 | 集合・整列・あいさつ・健康観察・前時までの確認・準備運動 | | | | | | | |
| | オリエンテー ション ・学習のねら い、学習の 進め方を知 る。 | 【スキルアップタイム】 基礎基本の技能習得 《対人パスタイム》 《4コーナーパスタイム》 《シュートタイム》 | | | | | | |
| | | ねらい①…パスを受けることができる位置に考えて動こう。 | ねらい②…パスを受けることができる位置にすばやく立とう。 | | じりん子 ワールド杯 | | | |
| | | 【タスクゲーム①】 ・6マスゲーム（3対1のパスゲーム） | 【タスクゲーム②】 ・6マスゲーム（3対2のパスゲーム） | | | | | |
| | 【メインゲーム】 ・6マスを生かしたオールコートゲーム（3対3） ・攻撃側数的優位制（攻撃専門1名） | | 学習のまとめ をする。 | | | | | |
| 片づけ・集合・整理運動・本時の振り返り・次時の予告・あいさつ | | | | | | | | |

《シュートタイム》（3分）



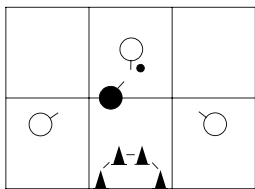
- ①AはBにパスを出す。
- ②Aはサイドに走り込んでBからパスを受け、シュートする。



タスクゲーム 《6マスゲーム》



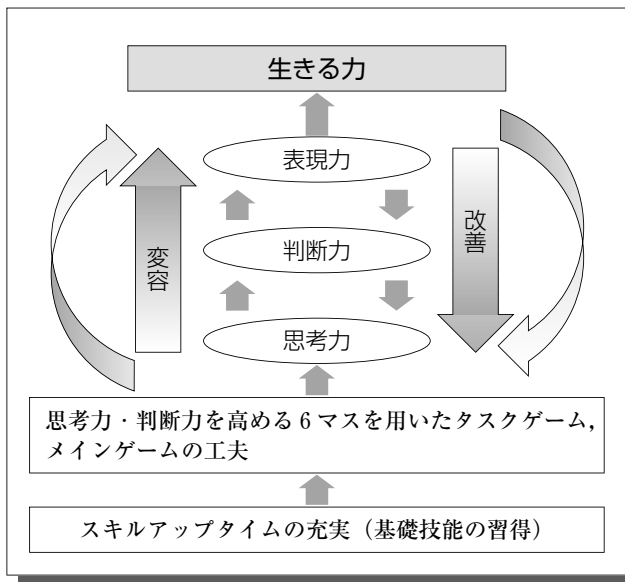
- ①攻撃側3人は、6マスのいずれかに1人ずつ入る。
- ②ボール保持者を頂点としたトライアングルパスを回す。
- ③正面のゴール1点。サイドは3点。最初の得点は10点。



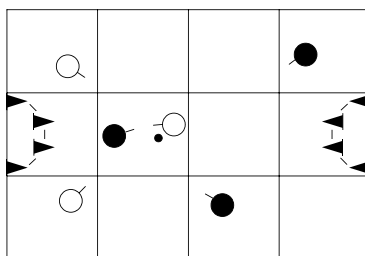
(3)運動の場やルールの工夫

「メインゲーム」では、6マスコートを活用したオールコートで、ボールを持っていないときにボール保持者を頂点としたトライアングルを常に意識すること、ボールを保持したらゴール方向に

【図1】 研究の全体構想



メインゲーム



- ①3対3で行い、攻撃側数的優位制にするため、攻撃専門の1名は守備に加わることができない。
- ②ボール保持者がかわり、攻守が入れかわったときの自陣の出すボールカットはなし。
- ③得点はタスクゲームと同じ。
- ④ゴールの後は、ローテーションして行う。

進むことを徹底させた。また、児童にとって判断することが複雑にならないようにドリブルは禁止とし、今はシュートなのか、パスなのかだけを思考・判断して、動くことができるようにした。

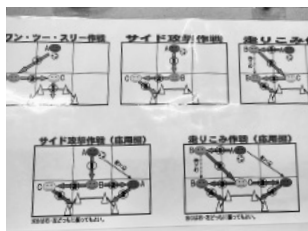
【写真1】 掲示板による技能のポイントの掲示



【写真2】 作戦ボード (表面)



【写真3】 作戦ボード (裏面
に示された5つの作戦例)



【写真4】 全体掲示板 (作戦例などを提示)



【ゴールの工夫】



・得点しやすいようにゴールを大きくした。また、サイド攻撃がしやすいようにゴールの形を工夫した。コーンの間の段ボールに当たれば得点。

【ボールの工夫】

・ボールは、弾まらず転がりにくいフットサル用のボールを使用した。



【写真5】 みんなで各チームの作戦やよかった動きなどを確認する。



(4) 言語活動の充実

技能のポイントを掲示し、子どもどうしの教え合いや励まし合いができるようにした(写真1)。また、作戦ボードを用いてチームのめあてや攻め方・守り方を共通理解できるようにした(写真2)。さらに、作戦が立てやすいように、作戦ボードの裏面と全体掲示板に作戦例を示し(写真3, 4)、作戦例はサイドを生かした攻撃や、スペースに走り込んでパスをもらうなど、5パターンを用意した。全体掲示板には各チームの作戦を掲示し、児童のよかった動きを全体で確認し合った(写真5)。

(5) 指導と評価の一体化

指導内容を明確にするために、毎時間1つのねらいを設定し、学習カードにも記載した。児童どうしの学び合いにおいても、ねらいに即した場面を評価できるように声かけをするとともに、振り返りの時間に学習カードに自己評価をさせるようにした(写真6)。

(6) 6マスゲームの活用のしかた

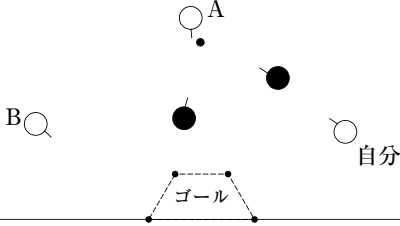
単元を通した6マスのコートでの使い方は以下のとおりである。

- ・1時間目…試しのゲームを(6マスの使い方やトライアングルの作り方は教えず、今もっている力で)行い、課題を出させる。
- ・2時間目…3対1でタスクゲームを行う。1マスに1人入り、トライアングルの形をつくることによってパスがつながるようになることをおさえる。パス&ランの動きについても指導する。
- ・3時間目…トライアングルにも大きいトライアングルや直角三角形のトライアングルなど、様々なトライアングルがあることをおさえる。
- ・4時間目…3人でボールをつないでシュートを決めるワン・ツー・スリー作戦を教える。
- ・5時間目…タスクゲームを3対2で行う。このあたりでパスが通りにくくなるので、もう一度、パス&ランの大切さをおさえる。サイドを活用した攻撃についても指導する。

| じりん子ワールド杯 6年 4組 () | | | |
|---------------------|---|---|---|
| ねらい | 近くにいるフリーの味方にパスを出そう。 | ボールをもらえる位置に移動して、パスを受けよう。 | ボールをもらえる位置に移動して、パスを受け、受けたらシュートしよう。 |
| 個人のめあて | フリーの味方に強くてとやすいパスを出す。 | 走りこみをしてパスをもらう。 | ボールを受け、パスを打つ。 |
| スキルアップ タイムの手応え | 31回 7回 3点 | 28回 10回 4点 | 32回 10回 4点 |
| タスクゲーム | オフェンス 30点 | オフェンス 10点 | オフェンス 10点 |
| 作戦 | ボールをフリー味方にパスを出す。 | ボールをフリー味方にパスを出す。 | ボールをフリー味方にパスを出す。 |
| 試合結果 | 自分のチーム (22点) サポートチーム (21点) 勝ち・引き分け・負け | 自分のチーム (30点) サポートチーム (44点) 勝ち・引き分け・負け | 自分のチーム (36点) サポートチーム (10点) 勝ち・引き分け・負け |
| 振り返り | フリーの味方にパスを出すのが上手だった。 | 走りこみをしてパスをもらうのが上手だった。 | ボールを受け、パスを打つのが上手だった。 |

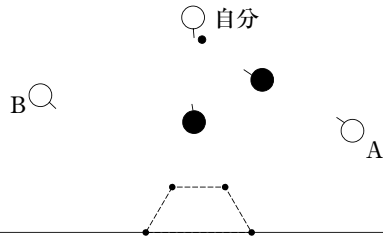
【思考・判断テスト】

問題①…次の場面であなたはどのようにしてパスをもらいますか。



| | 無回答 | 誤答 | 正答 |
|-------|-----|-----|-----|
| 授業実施前 | 7人 | 15人 | 15人 |
| 授業実施後 | 0人 | 0人 | 37人 |

問題②次の場面であなたがゴールするまでの動きを考えましょう。



| | 無回答 | 誤答 | 正答 |
|-------|-----|-----|-----|
| 授業実施前 | 8人 | 21人 | 5人 |
| 授業実施後 | 0人 | 1人 | 36人 |

- ・ 6時間目…すばやいパスを出すことや、ボールを走り込んでもらうことの大切さを指導する。
- ・ 7時間目…今まで学んだ作戦から、自分たちのチームの特徴に合った作戦を選び、実践する。
- ・ 8時間目…自分たちの選んだ作戦を見直し、修正した作戦を実践する。

3. 実践の考察

(1) 成果

◆思考・判断のテスト結果から

授業実施前と授業実施後に、思考・判断を問う自作テストを行った。問題①では、「ボール保持者と自分の間に守備者がいないように立つ」、問題②では「一度味方にパスを出してから、スペースに走り込んでボールをもらってシュートをきめる」という高度な思考を問うた。授業の中でトライアングル移動やパス&ラン、スペースに走り込む動きを繰り返し指導してきたことにより、授業実施後の正答者数が飛躍的に伸びた。

◆ビデオ観察による出現回数の推移から

単元が進むにしたがい、どのチームもボールをキープする時間が短くなり、すばやく思考・判断ができるようになった。また、パス&ランや味方へのすばやいパス回し等の回数が増えた。このことにより、ボールを持たないときの動きがどの児童にも身につく、スペースを見つけ、正しく思考・判断・表現ができるようになったことがわかる。

○ 2時間目 (A) と 8時間目 (B) の出現回数の違い

- ・ ボールキープのしすぎ…A: 10~15回→B: 0~5回
- ・ パス&ラン……………A: 0~3回→B: 18~35回
- ・ すばやいパス回し……………A: 0~3回→B: 5~20回

(2) 課題

運動量を確保しながら思考力・判断力を育成することや、思考・判断したことをゲームの中で表現するために1人ひとりの技能を向上させることが重要である。そのためにも、系統性や授業時数をしっかり考慮した年間指導計画を組んでいく必要があると考える。(ますおか・さおり)

心と体を解き放ち、 ペアでかかわりを深める授業の工夫

東京都東三鷹学園三鷹市立第一小学校教諭 花坂 未来

はじめに

本校は、平成26年度、体育における表現運動系の学習を通じ、「思いや考えを伝え合い、自分の考えを深められる児童の育成」というテーマで校内研究を行った。本校で表現運動を研究している理由は2つある。1つ目は、全員がある程度同じ土俵に立ち、研究を行うことができるという点である。本校では表現運動のスペシャリストの教員はおらず、表現運動のことがよくわからないという状態だったため、校内で一体となって研究に取り組むことができるのではないかと考えた。

2つ目は、校内の児童の雰囲気である。本校はコミュニティスクールを基盤とした小中一貫校である。地域の方に見守られ、子どもたちは健やかに成長し、児童が何事も一生懸命に取り組むことができる雰囲気がある。

平成26年度の成果としては、運動が苦手な子ども心解き放ち、活躍することができたこと、表現運動という領域に真正面から向き合うことができたことなどがあった。課題としては、学年に適した題材や声かけがわからない、恥ずかしがってしまう児童へのアプローチや手立てがわからない、などがあった。

このような点から、平成27年度は「すべての児童が夢中になる表現運動の指導方法の工夫」というテーマで校内研究を行うことになった。すべての児童が夢中になるためにはどうすればよいかということを「学習過程」「導入」「題材・音楽・テーマ」の3つの視点から工夫をし、全学年が1回ずつ校内研究で授業を行っている。

なお、本校では長年、東京学芸大学教授の松田恵示先生に校内研究のご指導をお願いしている。本誌面では、私が平成26年度に担任していた3年生の10月に行った校内研究の実践をもとに報告する。

1. 児童の実態と担任の願い

この学年の児童は、第1学年時の運動会で、表現遊びを生かした演目を行っている。具体的な生活に即した、洗濯機の中の洗濯物になりきる演目である。汚れたシャツが洗われる→脱水される→干される→きれいになる、という短いストーリーで構成されていた。今回の研究授業で扱う「具体的な生活」を表現する点については、すでに経験していることとなる。

また、3年生の運動会でも表現運動を取り入れた演目でブラックホールに飲み込まれる惑星を表現した。速さ、体勢、友達とのかかわり、動き方を工夫して、それぞれが違う動きをしようと試みている様子が見られた。

上記のように表現運動をたくさん経験している子どもたちに何が大切なのかを考えると、自然に夢中になる雰囲気の導入が大切であると考えた。具体的には2つある。1つ目は「音楽に合わせて体を動かすこと」に肯定的な児童が多いため、リズムダンスを導入に行い、自然と心解き放つことができるようにしていくことである。2つ目は、即興的に表現する際にペア学習を取り入れることである。ペアを取り入れることで、全員が動かなくてはいけない必然性が生じる。また、ペアで活動しやすいテーマを教師が設定することで、児童が自然と夢中になれるようにしていく。

2. 授業の工夫

(1) 誰とでもかかわれる活動の工夫

① ペア学習の工夫

単元を通してペアでの活動を基本にし、いろいろな友達とかわることができるようにした。心と体を解き放つ表現運動では、まだかかわりの浅い友達とも活動がしやすいと考えたからである。今後、他の授業や学級活動において、表現運動で

経験した友達とのかかわりをきっかけとして、学級全体のつながりに広げていきたい。導入のリズムダンスでも、ペアをかえながら友達と合わせて踊る一体感を感じられるようにした。楽しい音楽を流すこと、学級活動とのかかわりをもたせることを意識して、いつでも誰とでも活動ができるような雰囲気づくりをしていくようにした。

②学習グループ編成の工夫

今回は単元を通してペア学習を基本としたので、発表形式の工夫として、ペアを2つずつの兄弟グループをつくり、誰がどんな動きをしていたか伝え合う時間を設けた。例えば、第2～4時のミニ作品づくりにおいては、見合うグループを1つに絞ることで、友達のよい動きに気づいたり自分たちの課題を明確にとらえ直したりすることができるようにした。そして、それを教師が価値づけることで、次の自分の動きに生かせるように支援する。

(2)学習過程の工夫

毎時間の導入で、リズムダンスを取り入れることで、心と体を解き放ち表現しようとする意欲を高めるようにした。アンケート結果では、必ずしも表現運動が得意な児童ばかりではない。少しでも友達との一体感を感じ、授業の中でどんな動きをしてもよい、友達が一緒に表現しているという安心感が生まれるように、心と体を解き放たせたい。そこで、表現運動の活動に入る前に体ほぐしの運動を取り入れることで、授業のテンポを落とすことなく、運動量を確保したいと考えた。

3. 単元計画と評価規準 (表1 参照)

①3・4年生の2学年を見通した単元計画

3年生では「具体的な生活からの題材」を授業で行い、4年生では「空想の世界からの題材」を授業で行う予定である。4年生になっても、リズムダンスは導入で毎回行い、表現運動の世界に入るスイッチとしていきたい。また、2年間リズムダンスを導入で行うことで、音楽に合わせて体を動かすことが楽しいという感覚をもたせて、高学年に上がらせたいと考えた。

②リズムダンス

心と体を解き放ち、児童が自然と表現の世界に入っていくことができるようにするために、導入ではリズムダンスを行い、「Chocolate」という曲を使用した。この曲は、チョコレート作りをする

動きがコミカルで3年生にぴったりであったこと、児童がリズムにのりやすく恥ずかしさを捨てるのにぴったりであったことなどから、この曲を単元を通して導入で行うことにした。

③体ほぐしの運動

リズムダンスの後、すぐに表現運動に入っても、まだ完全に心と体を解き放つことができない児童がいることが考えられる。そこで、リズムダンスと本時の表現運動とのつなぎとして、表1の中に示すような9つの体ほぐしの運動を行った。

紹介した9つの運動のよいところは、誰でも気軽に楽しみながら体を動かすことができること、勝ち負け関係なく運動自体が楽しいことである。リズムダンスの後に体ほぐしの運動を間髪入れずに行うことで、ふだんの自分を忘れ、心に感じたことを素直に体で表現できる世界に入っていきやすいようにする。なお、1時間目に行った体ほぐし運動のミラーストレッチ、アイコンタクトダンスを2、3時間目の体ほぐし運動にも入れることで、意欲を継続させたいと考えた。

実際の授業では、リズムダンスの後に体ほぐしの運動をしっかり行ったことで児童は息が切れるほどの運動量があった。その後、そうじや料理などの1日の生活を即興的に表現したが、リズムダンスと体ほぐしの運動の勢いそのままに思いっきり体を動かしていた。

④評価

1時間目は、表現の授業の導入になるリズムダンス、体ほぐしの運動、ミラーダンスなど比較的児童が活動しやすい運動で組んでいる。そこで、その活動しやすいなかで、児童がどのぐらい関心をもち、活動に取り組むことができていたかを観察する。ここで、関心をもつことができない児童がいた場合、何らかの手立てが必要になる。

2時間目は、「そうじ」をテーマに即興的に表現することがめあてである。2人でごみを表現したり、1人はぞうきんを絞る人、もう1人はぞうきん自体を表現したりと、2人組で対応する動きを表すことをめあてとしたので、2人で対応する動きができていたか、技能面を中心に評価する。

3、4時間目は、料理と1日の生活を即興的に表現することがめあてである。1、2時間目と比べると、少し抽象度が増す。そのなかで児童がどう考えたことを表現しているか、思考面を中心に評価する。

[表1] 単元計画および評価計画 / 3年生：表現運動

| 即興的に踊ることや、踊りのポイントをつかむ | | |
|-----------------------|---|---|
| 時 | 第1時：友達と一緒に楽しく踊ろう | 第2時：友達と一緒に楽しく「そうじ」をしよう |
| 0 ～ 45 分 | <ol style="list-style-type: none"> リズムダンスと体ほぐしの運動で、心と体をほぐす。 <ul style="list-style-type: none"> ・リズムダンス (♪Chocolate) ・進化じゃんけん／エルボータッチ／トゥータッチ 本時のめあてと学習内容を確認する。 ミラーダンスやアイコンタクトダンスを通じて、4つの変化を知る。 【ペアの工夫】 <ul style="list-style-type: none"> ・ミラーストレッチ…教師の動きに合わせて動く。 ・ミラーダンス…2人のうち1人のまねをして動く。 ・アイコンタクトダンス…相手の動きを見て反対に動く。 いろいろな動きを取り入れて踊る。 振り返りとクーリングダウンを行い、学習のまとめをする。 | <ol style="list-style-type: none"> リズムダンスと体ほぐしの運動で、心と体をほぐす。 <ul style="list-style-type: none"> ・リズムダンス (♪Chocolate) ・じゃんけん列車／バランス崩し／ミラーストレッチ 本時のめあてと学習内容を確認する。 そうじをテーマにし、即興的に表現する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ごみとごみ、ほうきで掃く人とごみ、ぞうきを絞る人とぞうきなど。 <p>【ペアの工夫】</p> <ol style="list-style-type: none"> ・そうじ①…2人で同じものを表現する。 ・そうじ②…1人はほうき、1人はほうきで掃く人を表現。 ・表現したいそうじをペアで1つ決め、中心にしたい動きにはじめとおわりをつけて作品を作る。 4つの変化を意識して兄弟グループで見合う。 1つの題材を、友達とかかわり合いながら全員で表現し、学習のまとめをする。 |
| 評価※ | <p>・表したい感じを表現したり、リズムの特徴をとらえたりして踊る楽しさにふれることができるよう、進んで取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】</p> | <p>・身近な生活などの題材からその主な特徴をとらえ、対比する動きを組み合わせたたり、繰り返したりして踊ることができる。【技能】</p> |

4. 成果と課題

①成果

- ・ペアを変える機会が多かったぶん、いろいろな児童とかかわることができた。
- ・兄弟グループをつくったことで、発表を見る必然性が生じた。
- ・リズムダンスと体ほぐしの運動で心と体を解き放つことができた。
- ・やる前より「好きになった」「やや好きになった」児童が35名中29名。
- ・「音楽に合わせて体を動かすのが好きになった」の肯定的評価が25人から30人に増えた。
- ・「いつでも、どこでも、誰とでも」の肯定的評価が26人から30人に増えた。

②課題

- ・男子どうし、女子どうしのペアができることが多かった。ペアを制限したり、ふだんあまりかかわらない子とかかわってみよう、という声かけを多くしたりしてもよかった。
- ・見合いの際、視点を与えたが、児童どうしの声のかけ方（ほめ方、認め方）について具体的なお手本を示すなどの指導を事前にしておけば、よいところをさらに伝えることができたかもしれない。
- ・そうじ、料理などを表現する音楽にもっと変化、起伏がある曲を選ぶと山場がわかってよかった。はじめとおわりがわかりづらくなっていた。
- ・単元前から音楽に合わせて体を動かすことに否定的であった1名の児童に注目して観察していたが、とても楽しそうに動いていた。しかし、

単元後のアンケートでは、表現に対して否定的な感想であった。学習カードにおける自己評価と実際の動き、どこをどのように見ていくのか考えていく必要がある。

おわりに

①表現運動に取り組む意義

本校では、表現運動をテーマに校内研究を2年間行っている。研究2年目も終盤にさしかかり、表現運動に取り組む意義はどこにあるのかを考えてみたい。1つ目は、「全員が活躍できる可能性がある領域」である。器械運動、走・跳の運動などの領域では、運動能力、運動経験など技能差が大きいことがある。しかし、表現運動では、ダンスを習っている子がいたとしても、ダンスをするわけではないので、全員がほぼ同じ土俵で授業を始めることができる。また、表現運動は、ゴルフフリーの学習である。ペアやグループ、クラス全体で考え、何かを生み出すことは、相手とコミュニケーションを図り、主体的に活動する姿勢につながっていくのではないだろうか。そして、主体的に活動に取り組み、成功体験を積むことができれば、体を動かすことの楽しさを実感し（特に、ふだん運動が得意と感じていない児童）、生涯にわたって運動に親しむ姿勢を身につけさせることにつながる可能性がある領域である。

2つ目は、現代社会との関係である。現代社会は、情報に溢れている。何かがあるとインターネットですぐに情報を探し、安易に答えを求める傾向にある。情報は溢れているが、自分が何をすれば

※評価：第1時は対比・対極の動きを中心とし関心・意欲・態度を重点評価する。第2時は相手の動きを受けてどのように動くかを
中心とし技能を重点評価する。第3・4時はイメージを変化させて表現することを中心とし思考・判断を重点評価する。

工夫して友達と一緒に表現する

第3時：友達と一緒に楽しく「料理」を作ろう

- リズムダンスと体ほぐしの運動で、心と体をほぐす。
・リズムダンス（♪Chocolate）
・じゃんけん列車/バランス崩し/アイコンタクトダンス
 - 本時のめあてと学習内容を確認する。
 - 料理をテーマにし、即興的に表現する。
・ホットケーキ、おもち、カレー、ポップコーンなど
- 【ペアの工夫】
- ・お料理①…2人で同じものを表現する。
 - ・お料理②…2人で違うものを表現する（ホットケーキとフライパンなど）。
- 表現したい料理をペアで1つ決め、中心にしたい動きにはじめとおわりをつけて作品を作る。
 - 4つの変化を意識して兄弟グループで見合う。
 - 1つの題材を、友達とかかわり合いながら全員で表現し、学習のまとめをする。

第4時：友達と一緒に楽しく「1日」を過ごそう

- リズムダンスと体ほぐしの運動で、心と体をほぐす。
・リズムダンス（♪Chocolate）
・指フェンシング/ひざタッチ
 - 本時のめあてと学習内容を確認する。
 - 1日の生活をテーマにし、即興的に表現する。
・朝ごはん、外遊び、給食、おやつ作り、おふろなど。
- 【ペアの工夫】
- ・ごはんタイム…いろいろな料理を作って食べる。
 - ・学校タイム…勉強（鉛筆・消しゴム）、そうじ
 - ・おうちタイム…歯みがき、おふろ
- 表現したい1日の生活をペアで1つ決め、中心にしたい動きにはじめとおわりをつけて作品を作る。
 - 4つの変化を意識して兄弟グループで見合う。
 - 1つの題材を、友達とかかわり合いながら全員で表現し、学習のまとめをする。

- ・表現やリズムダンスの動きのポイントを知るとともに、自分に合った課題や題材を選んでいる。
- ・よい動きを知るとともに、友達のよい動きを自分の踊りに取り入れている。

【思考・判断】

よいかという答えは一切ない。情報ばかりに踊らされ、自分で意思決定する習慣がないと、身体感覚（五感）が鈍っていくのではないかと危惧している。

子どもたちが中学や高校の受験をするとき、就職先を決めるときなど、すべて答えはなく、自分で道を切り拓き、自分の考えで決断をしなくてはならない。だからこそ、言われたことを素直に実行することを重視するのではなく、自分で考え、行動することを小学校の段階から重視していく必要がある。表現運動は、自ら思考し、行動することが体育の中でも最もしやすい大切な領域ではないだろうか。

3つ目は、ふだんとは違う自分、クラスを感じる経験をすることができる可能性がある。人は必要がなければ、自分にとって居心地がよい場所で居心地がよい行動しかなし。しかし、2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されたり、公用語が英語になる日本企業が出てきたりするなどグローバル化の波は押し寄せている。居心地のよい温室で育った花は温室でしか育たない。また、その温室はいつまであるかわからない……。となれば、自分の幅を広げ、体全体で非日常の経験をすることは、子どもたちにとってとても意味があるものと考えた。よくわからないけど、音楽に合わせて体を動かしてみた、落ちていたゴミを表現してみたなど、先の見えない不安定な環境、場所に身を置かせることに意味があると考えた。安定したゴールありきの場所でしか活動をしていない子どもは、不安定な場所に出たとき、対応で

きなくなる可能性がある。だからこそ、どこにたどりつくかわからない表現運動を行うことで、どんな状況でも自ら考え、楽しむことができる児童を育てていくことができるのではないだろうか。

②誰でも取り組める表現運動を目指して

「表現運動は取り組みづらい」「何をどうすればよいかわからない」という声をよく耳にする。では、どうすれば表現運動に取り組みやすくなるのだろうか。いくつか提案してみたい。1つ目は、リズムダンスの音楽を学校で統一し、振り付けをサビのみにすることである。これは1曲でもよし、学年ごとに変えてもかまわない。「他の授業もあるのに、リズムダンスの振り付けを考えるのがたいへんだ」という意見があるだろう。そこで、サビのみ振り付けを考えて、後は、音楽をバックグラウンドミュージックにし、体ほぐしの運動を行う。例えば、バランス崩しやひざタッチゲームなどを2人1組で行い、サビだけみんなで同じ動き（全員で体育館を動き回るなどでもよいかもしれない）をすることで、リズムダンスの振り付けを考えるという壁が1つなくなる。

2つ目は、6年間を通じた単元計画の作成である。どの学年で何をするのか学校で明確になれば、誰でも取り組める表現運動に少しでも近づけるのではないかと考える。表現運動に取り組むことは、教育の可能性の広がり・深まりを感じる。まだまだわからないことや考えたいことがたくさんあるので、引き続き研究を重ねていきたい。

(はなさか・みらい)



日本の未来と 「遊び」としてのスポーツ

— 国ぐるみのドーピング問題から考える —

ジャーナリスト 岡崎 満義

神の領域へ踏み込む科学の進歩

昨年11月、恐ろしいテレビ番組を見た。NHKのドキュメンタリー『それはホロコーストの“リハーサル”だった～障害者虐殺70年目の真実～』（2015年11月7日放送）という番組で、ナチスドイツ時代の「優生学」を扱ったものだった。知的障害、身体障害、精神障害など健全に進歩発展していく社会にとってマイナスとなる“悪いタネ”はできうるかぎり排除する。“よいタネ”だけを残し、豊かで幸福な社会をつくっていく。そういう優生学を率先して推し進めたのは狂気のヒトラーの号令一下、ではなく、優秀な精神医学者たちだった。今、精神医学会として深く反省し、謝罪するというものだった。「優生学」が“悪いタネ”として様々な障害をもつ人々を抹殺しようとした延長線上に、ユダヤ人抹殺のホロコーストが出現した、とそのドキュメンタリーは残酷な生々しいシーンを次々に映しながら視聴者に訴えていた。私は見ていて本当に恐ろしかった。

これは80年ほど昔の特別な出来事として忘れ去っていいものだろうか。例えば、DNAの正確な検査、妊婦の出生前の異常児認知検査、さらにはiPS細胞の研究で臓器再生も可能になりそうな事態、医療科学はどこまでも発展していった、「健全」への欲望は限りなく高まっていくだろう。神の領域と思われていたところへ、科学の進歩によってどんどん人間が踏み込んでしまう。「健全」な人間だけで構成された社会をユートピアと言っているのだろうか。と言ったところで、科学技術はどんどん進歩していく。ブレーキの無いアクセルだけの車に乗っているようなものだ。「健全」信仰の先には、一歩間違えれば、とんでもないところに連れて行かれそうな危うさがある。

ちょうどこの時期、新聞は連日ロシアの国ぐるみのドーピング問題を報道していた。発端は2014年12月、ドイツ公共放送ARDの番組で、ロシア

陸上競技のユリア・ステパノワ選手が2011年と2012年のロシア室内選手権に出たとき、薬物を使用したと証言したことだ。ステパノワ選手はコーチから検体の番号を伝えるように言われ、さらにモスクワ反ドーピングセンターのロドチェンコフ所長に3万ルーブル(日本円で約8万5千円)を支払えば陽性にはならない旨の説明を受けたようだ。

そして今回、世界反ドーピング機関(WADA)独立委員会の衝撃的な内容の報告書が発表されたのだ。公認のモスクワ反ドーピングセンターと同じ設備をもつ「裏検査所」が存在したこと、ロシア政府の情報機関・連邦保安局(FSB)の職員がずっと公認検査機関を監視、定期的に訪問していたこと、抜き打ち検査情報を事前に漏洩し、それに伴って賄賂の授受もあったこと、国の研究所が選手やコーチに様々な薬を提供し、陽性反応の出ない薬物も研究していた可能性があること、選手がドーピングを拒否した場合は、代表チームを外され、選手生命を絶たれたりしたケースもあったこと、などが報告されたのだ。まさに国ぐるみのドーピング漬け、ドーピング隠しが行われていたということになる。

思い出す“女ボパイ”

私は連日のドーピング疑惑の報道を読みながら、1980年4月に創刊したスポーツ総合誌『Number』第8号(1980年7月20日発売)でモスクワ五輪大特集をした中に「“金メダルの狩人”エンダーはいかに作られたか?——“スポーツ独裁”国家・東独『政治と薬』の内幕」を掲載したことを思い出した。これはカナダ人ジャーナリストのD・ギルバートさんが東ドイツのスポーツ事情を詳細にレポートした「The Miracle Machine」をもとにジャーナリストの徳岡孝夫さんにわかりやすく執筆してもらったものだ。

1976年のモントリオール五輪の女子水泳で東独

のコーネリア・エンダー選手は100m, 200m, 400mの自由形, 100mバタフライの4種目で金メダルを獲った。野太い声, ものすごい筋肉で“女ポパイ”とあだ名されエンダーのドーピングが疑われ,

「男性ホルモンのとりすぎで, エンダーはたとえ結婚しても子供は産めない」と報じた新聞さえあった。

17歳のエンダーは, 男子背泳の王者ロランド・マッテス選手と婚約しており, 事実ベルリンへ帰るとまだ全盛の18歳でさっさと引退して1年後に結婚, すぐに女兒の母となった。その記事の中こうある。

「ギルバート記者は何度もエンダーに会っているが, モントリオール五輪の一年後の東独ハレでのインタビューは, なかでも印象的だ。

ごくふつうの格好をしてホテルのロビーに会いに来たエンダーは, そこらの高校生と見分けがつかなかった。それがなぜ驚くべきことかという, 全盛期に引退した運動選手は, 例外なくブクブクふとるからである。(中略)

しかし, エンダーは引退後に7kgやせていた。その秘密は, ダウン・トレーニングだった。『私は, いまでも毎日, コーチ付きで2000m泳いでいます。東独では, みなこうします。競技を目標に生きてきた人間を正常な状態に戻すのは, 国家の仕事だからです』

エンダーは, そう語った。彼女は, いま小児科医になる勉強をしている。国家はそれを助けるために, エンダーを最高の状態にまで上げていったトレーニングを逆にやって, 水泳選手として徐々にフェーズ・アウトさせようというのである」

見事な国家による優秀な個人の身体管理である。ドーピングに関しては,

「ドーピングは……証拠がないのでなんともいえないが, おそらく西側もやっているのだからあんなことと思われる」と書く。

ドーピングはなぜ悪いのか。毎日のトレーニングで鍛え上げた自然な身体で勝敗を, 記録を公平に争うのがスポーツであり, また薬物を用いることによって将来様々な後遺症があらわれ心身を傷つけてしまうからだといわれる。しかし, 世界選手権やオリンピックでメダルを獲ることができれば,

大きな名誉とビッグマネーも期待できる。そしてメダルの数の多さを国威発揚と考える国家も出てくる。スポーツを政治的に利用しようという国家は昔の東ドイツだけではない。WADAの報告書に見られるように, 現在もまたロシアはスポーツの政治的利用をはかっているとみられるのだ。

スポーツの遠心力と求心力

才能あるトップアスリートなら誰でも世界一になること, オリンピックで金メダルを獲ることを夢見るだろう。それは自然なことだ。ところが, 子どものころに楽しんだ運動会の発展した世界大運動会としてのオリンピックは, 今やグローバル化したスポーツ産業となっている。巨大なマネーが行き来するビジネスとしての側面がどんどん膨らんできた。1988年のソウル五輪で男子陸上100mのベン・ジョンソンが禁止薬物を使用したことが判明, 金メダルを剥奪されたり, ツール・ド・フランスの無敵の王者ランス・アームストロングが過去の薬物使用が発覚して7連覇が取り消され, 永久追放処分を受けたり, アメリカの大リーグでもドーピングはたびたび表面化している。ドーピング問題はスポーツ界をすっぽり包んでいるかのように見えるのである。スポーツ界の黒い霧である。これをどう掃い除くことができるのか。特效薬はありそうもない。

日本は今や少子高齢単身者社会の世界のトップランナーである。少子高齢単身者社会で大事なのは「遊び」であろう。高齢者の医療, 年金などの重圧が少子化の若い人たちの肩にずっしりとかかってくる, と悲観的な見方をする人が多くなったが, 高齢者が最後まで「遊び」を大事にするホモ・ルーデンス(遊ぶ人)として生き抜くことで, 社会的な浮力が少しはついてくるだろう。その「遊び」の中でスポーツの占める位置は高いはずだ。トップアスリートの育成が国のスポーツの遠心力とするならば, 「遊び」としてのスポーツは求心力といえるだろう。求心力が弱まれば遠心力が野放図に力を増し, それこそドーピングという退廃的な方向へ飛んで行ってしまいうちにちがいない。遠回りのようだが, ドーピング廃絶の決め手がない以上, 少子高齢単身者社会における「遊び」としてのスポーツの価値をあらためて探っていくことでスポーツの未来がひらけてくるのではなからうか。

おかげさまで、みつよし／一九三六年鳥取県生まれ。京都大学文学部卒業後、(株)文藝春秋入社。一九八〇年、スポーツグラフィック誌「ナンバー」創刊にあたり初代編集長となる。その後各誌の編集長を歴任し、退社後はジャーナリストとして活躍。近著「人と出会った」が岩波書店より好評発売中。

『デジタル体育』新内容と使い方

デジ 体

デジタル体育

平成28年度版

編集部

■平成28年度は、新領域の動画が追加！

平成27年度より、副読本『体育の学習』児童書＋指導書のご採択付録として、デジタル教材『デジタル体育』(DVD版／ストアアプリ版)がリリースされ、大変ご好評をいただいております。

平成28年度版では、「ボール運動の基本的な動きがわかる教材がほしい」「体力低下が叫ばれるなか、子どもの投能力を伸ばしたい」といった、全国の先生方のご要望にお応えし、昨年度の内容からさらに「ゲーム・ボール運動」動画を「つまずき解決法」に追加収録しています。以下、その「ゲーム・ボール運動」動画の概要をご紹介します。

まず、収録種目としては、以下の4種目が収録されています。

- ★ボールけりゲーム
- ★バスケットボール（ゴール型）
- ★ソフトバレーボール（ネット型）
- ★三角ベースボール（ベースボール型）

これらについて、それぞれ「ゲームの紹介」「動き方」の例示があります。「ゲームの紹介」では、異なったいくつかのルールของเกมの例が入っています。どんなゲームなのか、実際のゲームのイメージを確認することができます。「動き方」では、それぞれの種目の主に個人技能について、「正しい動き」「つまずきの例」「解決法（＝練習例）」が紹介されています（写真1）。

「正しい動き」については、特に学習指導要領解説に示されている動きの説明文が抽象的で、一見してイメージしづらい場合があるため、この動きを、具体的な例として動画で示したものです。どんな動きを身につけるのか、子どもにも先生にもゴールイメージがつかめます。「つまずき例」については、特に児童のよく陥りがちなつまずきを

【写真1】正しい動き、つまずき例、解決法選択画面



再現しています（「こうなっていませんか？」）。これにより、児童が持っている課題が明確になります。そして、その課題に対応した「解決法」が、動画で提示されます（「これで解決！」）。解決法の動画では、つまずきを解決するための練習方法や、動きのコツなどがわかりやすく解説されます。

■「デジタル体育」はこう使う！

ゲーム・ボール運動コンテンツを含め、デジタル教材「デジタル体育」をいつどのように活用することができるか、その使い方のコツを一部ご紹介します。

①副読本『体育の学習』の補足説明

副読本『体育の学習』は、授業の進め方がわかりやすく記載されていることが特徴です。学習過程や学習内容を概観したり、クラス内でゲームのルール、場の設定などについて共通理解したりすることに優れています。また、文字でポイントが一覧できるため、声かけの資料としても有用です。一方、体育は動きを扱う教科であり、イラストや連続写真だけではイメージのわからない児童がいることも事実です。授業のポイントで、「デジタル体育」の動画資料が強力な支援になります。

さらに、子どもが主体的に学習を進めるためには、まず適切なめあてを設定することが大切です。それには、めあてとなる動きを正確に理解する必要があります。副読本も大きな一助となりますが、こうした部分でも特に動画資料は有用といえます。

②子どもどうしの見合い、教え合い

課題解決学習を行ううえで、まず課題（＝つまずき）の見取りが必要です。しかし、特に課題の見取りは専門性が高く難しい部分です。「つまずき例」の動画を見ることで、自分と照らし合わせ

【写真2】 つまずき例「ボールの投げ方がわからない」



て「こんな感じで失敗してる!」と、つまずきの見取りが容易になります(写真2)。あらかじめ「つまずき例」の動画を見童全員に見せて共有してから、見合いの活動に入るなどの流れも考えられるでしょう。

また、そのつまずきを解決するには、どのような練習が適切かを考え、決定しなくてはなりません。どのような練習を行えばつまずきが解決できるか、その方法を一から考えることは専門性が高く、子どもにも先生にも非常に難しいものです。つまずきに対応して選択できる練習例などの資料があることで、そこから自分の課題に適した動きを選び(思考・判断)、行うことができます。

③授業前後

授業にあたって、体育館の壁に掲示資料を貼るなどの準備をする場合があります。そこで、『体育の学習』に掲載されている連続写真を、印刷可能な掲示資料としてご用意しました。器械運動は45技、陸上運動は3種目(ハードル走、走り高とび、走り幅とび)を扱っています。

現在学習している技の連続写真を体育館等に掲示だけでなく、掲示写真に見童が気づいたポイントを書き込んでいくなど、自由に使用することができます(写真3)。

また、「デジタル体育」には、動画撮影、保存機能があります。動画を保存すると、「年月日・曜日・〇時間目・種目」がついたフォルダ内に動画が自動保存されます。種目や日にちで並べ替えができるだけでなく、「☆」印のついた動画の入ったフォルダのみ抽出表示することもできます。教師にとっては、保存した動画で、見童の技能の高まりをいつでも確認、評価することができます。見童にとっては、今の自分の動きがすぐに確認でき、

【写真3】 掲示用写真素材集の活用



次時への課題が明確になります。その結果、見童は自然に課題解決学習へと向かうことができます。



副読本『体育の学習』は、「やってみる—ひろげる—ふかめる」の学習過程にみられるように、子どもの目線で「どう学習するか」を提示することで、体育の授業を「ただ動くだけ」から「学習」たらしめる効果があります。一方、体育は「動き」を扱う教科であるという特性上、現在急速に普及が進んでいるタブレット端末等のICT機器と非常に相性がよいことは、いうまでもありません。この「紙」の教材と「デジタル」の教材が相互に補い合うことで、体育授業での教師の指導・支援と見童の学びはより促進し、深まっていきます。

特に、昨今注目されている「アクティブ・ラーニング」(子どもたちが主体的・協動的に課題を解決する学習)を実現するツールとして、これら副読本とデジタル教材の果たす役割は非常に大きいといえます。

お知らせ「とび箱運動」全動画を無料公開!

平成28年度版「デジタル体育」ストアアプリ版(Win8.1/iOS7~8対応・2016/4/1リリース予定)では、動画撮影・保存機能だけでなく、器械運動領域から「とび箱運動」について、全動画コンテンツが無料で閲覧可能になります。「デジタル体育」ストアアプリ版をストアよりダウンロードいただくことで、すぐに「とび箱運動」の授業ができます。ぜひご利用ください。

※すべての動画コンテンツを閲覧したい場合は、アプリ内で認証コード(児童書+指導書のご採択付録としてご提供)の入力が必須となります。

※詳細は、以下URLにて随時公開中!(弊社HP内)
<http://www.kobun.co.jp/dk/tabid/348/Default.aspx>